

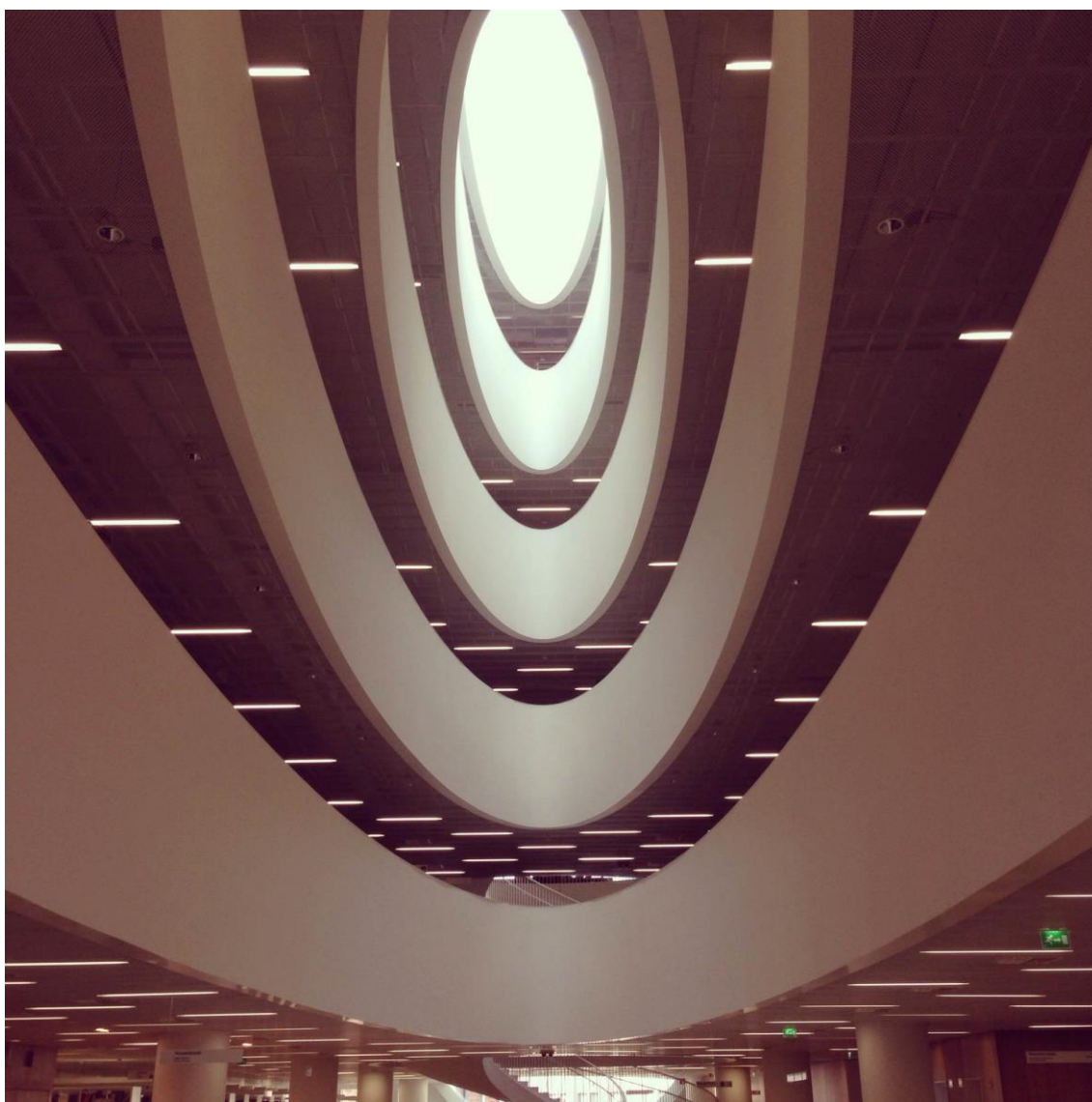
フィンランドに来て一ヶ月が過ぎようとしている。この記事では、私がこの一ヶ月でフィンランドの教育について感じたことを述べたいと思う。学校視察は今後行う予定なので、具体的なフィンランドの教育にまつわるエピソードは次の記事にて執筆させていただくことにして、ここではフィンランドの国全体としてのスタンスについて主に執筆することにする。



ヘルシンキ中心地の町並み

生活・学びを通して全体的に感じたことは、フィンランドはやはり評判に聞いていた通り、教育に対して非常に熱心な国であるということだ。私がそれを感じた具体的なエピソードは主に二点ある。

第一に、学費が無料であるためか人々が年齢に限らず学ぶことに対して非常に積極的であるという点だ。この一ヶ月間、フィンランドの学生と話す機会が多かったが、日本と比べると、一度働く経験をしてから大学で学び直す人や、違う大学や違う専攻で一度大学を卒業してから再度別の大学/専攻に入学し直す、ということをしている人が非常に多いという印象を受けた。また、医学や法律学などの専門家になるにあたって学費が無料であるために、あらゆる職業が貧富の差に関わらずすべての人に開かれている、とフィンランド人の友人(彼女もまた職業経験を持つ学生だ・一度自身の美容室を経営した経験を持ち、今は大学で神学を学んでいる)が語っていたのがとても印象的であった。



ヘルシンキ大学図書館

第二に、教員養成に非常に力を入れているという点だ。フィンランドでは、教師は自由にカリキュラムを組むことができるなど、非常に大きな裁量が与えられており、私が通う大学には、教員養成を専門としたコースが設けられている。そのコースでは、教員志望の学生向けに、指導科目の他にも、教育全体を俯瞰するクラスが多く開講されている。またこのコースは学生からの人気が非常に高く、その倍率は場合によっては10倍にも及ぶという。教員となることを志す学生が減っているというニュースを日本で聞いていた私にとってはこれはいささか驚きであった。加えて、そのコースに入学するために、志願生は試験とディスカッション、面接によって評価されるという。教員となるにあたっては生徒とのコミュニケーションをうまくはかれるかが非常に重要となってくると考えられるが、大学入学時からそのような能力を入学試験の段階で問うのは非常に合理的であるように私には思えた。

このように、私が当初想定していた通り、フィンランドは確かに教育大国であるということが、私のこの留学生活はじめてのヶ月間で明らかになったことであるが、こうした現状の背景として私が聞いたこと、及び私自身の個人的な感想から述べていきたい。

フィンランドの学生から聞いたことであるが、フィンランドは、無料で質の良い教育が受けられるようにすることが将来プラスに働くということを理解しているために、教育に力をいれるのだそうだ。例えば、教育に高いお金が必要であり、貧しい家庭の子供が適切な教育を受けられなくなると、それはゆくゆくは彼らの失業問題、ひいてはさらに深刻な貧困問題に発展する可能性がある。そのような事態を防ぐために、彼らは無料で質の良い教育を提供しているのだという。仮にそのような事態が発生したとすると、彼らに援助を施すことになったほうが、はじめから教育に資金を割いていた場合よりもずっとお金がかかってしまうと国が考えているのだと思うと、フィンランド人学生は語っていた。また別のフィンランド人学生は、フィンランドは人口や資源にさほど恵まれていないため、教育で国民の知力を上げることこそが国の発展につながるのだと、国が方針として掲げているのだと語っていた。





ヘルシンキ大学の向かいにある大聖堂

私がこの話から感じたのは、国全体の戦略・方針として育てたい人材が固まっており、だからこそ各学校や教師はその上で自由にカリキュラムを組むことが可能となっているのだということだ。カリキュラムのマイナーチェンジを国が主導して行うことはあまりなく、国は大まかな教育方針を、国民とも協議しながら決めていくのだという。大まかな教育方針が決まっているからこそ、国は安心して教員にカリキュラムを組むといった裁量を与えられるし、また教員は授業に工夫を凝らすことができるのではないかと感じた。カリキュラムのマイナーチェンジが昨今の日本の教育界では目立っているが、それよりもまず国全体として、戦略上育て上げたい人材をはっきりと定義づけることが重要なのではないかと、私がこの一ヶ月間のフィンランドでの生活で感じたことである。